寄せ太鼓

北九州市立長崎街道
木屋瀬宿記念館
運営協議会 広報部会
北九州市八幡西区木屋瀬
三丁目16番26号〔〒807-1261〕
TEL 093-619-1149
FAX 093-617-4949

長崎街道ひなまつり

「木屋瀬宿～立場茶屋銀杏屋」開催中

ひなまつりと共に長崎街道の歴史も併せて楽しむことができる「長崎街道ひなまつり木屋瀬宿～立場茶屋銀杏屋」は、今年で9回目の開催となります。旧長崎街道沿い観光文化施設4館連携による、おひなさまやそれに関連する展示を行うイベントで、4施設それぞれが違った雰囲気を演出しています。長崎街道の歴史も併せて楽しむことができるので、木屋瀬の古い町並みを散策しながらの施設めぐりをこの期間に行ってみてはいかがでしょうか。なお、今年は『もやいの家』でのひなまつりの展示は行いません。

みちの郷土史料館のおひなさま

【北九州市立長崎街道木屋瀬宿記念館】
○期間　2月13日(土)～3月28日(日)

みちの郷土史料館企画展示室にて、ひな人形の歴史や種類などを紹介するとともに、木屋瀬にゆかりのある人形作家の井上春子氏が制作した内裏びな2対も展示します。まずはみちの郷土史料館に訪れ、ひなまつりや長崎街道の豆知識を携えて他施設を巡ってみてはいかがでしょうか。

【旧高崎家住宅(伊馬春部生家)】
○期間　2月13日(土)～3月28日(日)

江戸時代末期の宿場建築の様相を色濃く残す屋敷の中に23台、約五〇〇体のひな人形が展示され、趣ある建物と併せて来館者を楽しませます。

旧高崎家住宅のおひなさま

【江戸あかりの民藝館】
○期間　2月13日(土)～3月28日(日)

館長である佐藤伸一氏が収集された、江戸時代の大名家や武家由来のひな道具を展示しています。当時の道具職人たちが、道具を模して作った精巧なひな道具の数々をお楽しみください。

【立場茶屋銀杏屋】
○期間　2月14日(日)～3月14日(日)

「大名びな」と呼ばれる手作りの巨大びなや、色とりどりのさげもんで『書院造の間』が飾り付けられ、表にはかわいらしい竹びなが並びます。

総合問い合わせ先
長崎街道
木屋瀬宿記念館
☎ 093 619・1149

――こやのせ座 New Yearコンサート 2021 報告――

1月23日(日)に響ホール室内合奏団の団員の方々をお招きして、新年をお祝いするコンサートをこやのせ座で開催いたしました。

当初入場定員は150名を予定していましたが、北九州市があらためて発出した新型コロナウイルス感染症対策基本方針により、施設収容定員50%以下の入場定員70名に変更して、参加予約をお受けすることになりました。定員に達したところで参加予約をお断りした方も多数おられましたが、当日は雨天による予約キャンセルもあり、参加者50名の皆様で開催いたしました。

コンサートは、「歌とピアノトリオによるメモリアルなひととき」と題し、ソプラノ、ピアノ、ヴァイオリン、そしてコントラバスが加わる編成で行われました。ソプラノによる歌唱が入ることで、プログラムはより一層充実した内容となり、クラシックからディズニーの映画音楽まで幅広く披露されました。また、コントラバスの音色は奥深く、心にしみいるようでした。

コロナ禍で気持ちが重くなりがちな毎日ですが、参加者の皆様には潤いあるひとときをお過ごしいただきました。

筑前木屋瀬　第10回 今昔歳時記

紅屋泰助氏(故　柴田泰助氏)の「筑前木屋瀬今昔歳時記」の第10回目です。今回は、「ひろば北九州」平成22年9月号に掲載された9月の行事・風物について、前編としてご紹介させて戴きます。

長月・九月には、先ず一日に本町六町恒例の庚申祭が行われます。

元来は、町内ごとに執り行われていました。が、現在は、本町六町輪番の当番制で執り行われ、今年は新地町内会の当番です。

此の行事は、本誌七月号に記載の〔木屋瀬いろは歌留多〕の「ち　町内(ちょうない)ごとに　庚申(こうしん)さん」の説明にありますように、宿驛往時の木屋瀬には町内ごとに庚申様が祀られ、干支の庚申にあたる日の夜は三尸(さんし)の難を避ける為、町内全戸主揃っての庚申講のお座が、夜を通してつとめられていました。

私の生れ住む本町では、庚申講のお座が昭和の中頃まで続いていたのを覚えて居ります。

尚、夜を通してつとめられる庚申講のお座では、町内の伝承や決め事・相談事なども行われていたことから、当地には今でも、話が長引き終わらない時には「続きは庚申さんの晩に」の言葉で、其の場を収める風習が残って居ります。

又、木屋瀬の庚申講のお座は町家の土間に祭壇を設えて〔莫蓙〕を敷き、執り行うのが本来の姿。現在では本町と下町が踏襲して居ります。

現在では、夜を通してつとめることも無くなりましたが、お座には萩の花などが飾られ、秋の訪れを感じさせる木屋瀬の風物でございます。

続いて、中秋の名月の宵には〔長徳寺・弁財天大祭〕が行われます。

此の行事も、七月号に掲載の〔木屋瀬いろは歌留多〕の「り　りんりん　すず蟲(むし)　弁財天(べんざいてん)」の説明の通り光明山色照院長徳寺の飛び地境内に鎮座する弁財天に伝わる行事で、この長徳寺は、浄土宗の二祖、聖光弁阿・鎮西上人の開基とされる木屋瀬随一の古寺でございます。

弁財天像は古くより長徳寺境内に鎮座していましたが、明治二十四年の大洪水により浸水荒廃。このため大正十一年、有志等の勧進により現在地へと遷座し、以来、昭和の中頃までは、勧進元の岩尾家・長徳寺・本町・新町ほか弁財天講有志により祭祀が執り行われていました。

当時は弁財天境内の地べたに〔莫蓙〕を敷き、蝋燭と提灯のあかりの下、名月を愛でながら厳かに行われ参拝する子供たちにはお菓子が配られていたのを懐かしく思い出します。

今思うに、古き良き時代の川筋文化に満ち満ちた宵でございました。

其の後、時の移ろいと共に長徳寺の本堂で行われるようになり、本堂改修時よりは暫く途絶えていたのを私の主宰する〔筑前木驛・茶目っ氣一輪〕の声掛けで復活しました。

観月会や歴史講和・芸能などを盛り込み、広く木屋瀬住民に親しまれる行事を目指したこともございましたが、宗派・檀家の違いに依る敷居・垣根などがあり、なかなか儘ならずに休止いたしました。今では篤志家による堂宇の新造を機に、長徳寺関係者で執り行われています。

以上、木屋瀬の九月の行事と風物でございます。

つづく（記念館）

いろはかるたのご紹介

わ　わきほんじんは　ながさきや
脇本陣は　長崎屋

宿驛往時、黒田藩は参勤交代の九州諸大名や幕府重臣の長崎奉行・日田郡代などが宿泊する本陣(茶屋)を設けました。大名や幕臣の関係者は脇本陣(町茶屋)に宿泊しましたが、それには長崎屋と薩摩屋がございましてシーボルトや伊能忠敬も宿泊したと古文書に残っております。

シリーズ

文化の薫る町　木屋瀬

第一回

前回まで五十回にわたり、木屋瀬の神仏について掲載しましたが、今回から少し視野を広げ神仏も含め木屋瀬の文化について考察してみたいと思います。北九州市の北橋市長は、文化創造の街づくりを目指すと宣言されています。では、文化とはどのような事項でしょうか、総理府が調査した国民の文化のイメージは、

一、歴史的遺産が保存されていること
二、美術、音楽、芸術等盛んなこと
三、宗教や伝統的な祭りや行事
四、生活の中から生まれた知恵や工夫

等です。

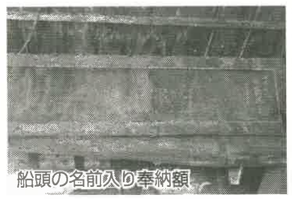
今回は、このような観点から木屋瀬の文化を捉え進めて行きます。

「今に残る木屋瀬の船頭文化」その一

木屋瀬は、宿場のイメージが強いですが、町の成立は遠賀川の河港、川船の物流基地として発足したのです。今から七～八百年前、西暦千三百年頃のことです。長徳寺を始めとして、須賀神社、西元寺永源寺、扇天満宮等の寺社仏閣を中心として集落ができ町が成立したものと推定されます。其の後、徳川幕府による街道整備が行われ、特に冷水峠が開通（1612年）してから、長崎街道の中でも特に繁栄した宿駅となり、現在の街並みの原型宿場町が成立したと思われます。

写真に残る銅馬

さて、木屋瀬の町民の産土神社であります須賀神社の鳥居を潜り、右側にある建物、参籠殿は、明治二十二年に木屋瀬の船頭さん達が銅馬といっしょに奉献した建物で、室内には寄進した船頭さんの百余名の名前が記載された奉納額が掲げられています。いまでは、大勢の船頭さんが木屋瀬にいたことなど想像できないですが、明治十九年の町の調査によると、船業者百十一所帯五百十二人と記されています。町民の半分が水運の関係者でした。又、遠賀川には二千艘余の船が往来していたと伝えられています。参籠殿は元来神職が神事の前に潔斎する建物です。室内には、江戸時代から木屋瀬の人々が祈願や満願成就のお礼として奉納した絵馬や絵師が描いた物など貴重な木屋瀬の文化遺産が多数掲示されています。この参籠殿は、今も、祇園祭りや恵比須祭、歳旦祭、春秋の祭等木屋瀬町民が何かにつけて集う場所として活用され、今も船頭さん達のご縁に預かっています。参籠殿は船頭さん達が後の木屋瀬の人々に残した素晴らしい文化遺産です。次に、扇天満宮の境内に金刀比羅宮が鎮座されているのをご存知でしょうか。天満宮に向かって左側の社です。海や川の守り神として信仰され「こんぴら」さんとして親しまれ漁業者や船頭さんに篤く、信仰される神様です。船頭は板子一枚下は地獄と言われるように危険な職業でもあり、船頭達が、安全と繁栄を願いこの地に、「金刀比羅宮」を勧請しました。鳥居には、「明治三十一年、木屋瀬船業中奉納」の刻印が微かに読み取れ、社額には、「金刀比羅宮」と記されています。玉垣は、明治二十三年の銘も見られます。川船の運行は鉄道が直方まで開通した後急速に衰退し昭和の初め頃に絶え、船頭も木屋瀬から消えてしまいました。遠賀川の船頭達は、信仰心が強く遠賀川流域各地に神々を勧請し、常夜灯や祠を多数残しました。その残された品々が当事を語ってくれます。又、県の民俗無形文化財である木屋瀬の「宿場踊り」の所作にも船頭の文化を色濃く残し、楠橋の唐戸（水門）も船頭文化の貴重な土木遺産の一つです。「文化とは現在と過去との対話である」の言葉がありますが、木屋瀬のご先祖の方々は素晴らしい文化を今に残してくれました。


船頭の名前入り奉納額

参籠殿

千年の銀杏散る～船着き場
船頭の盆歌ながる 遠賀川

本町　野口靖彦

■木屋瀬いろは歌留多大会　中止について

木屋瀬いろは歌留多大会は1月10日(日)にこやのせ座において開催予定でしたが、5日(火)以降に新型コロナウイルス感染症が急激な拡大傾向となったため、6日(水)夕刻に中止の決定を行い、7日(木)に関係者へお知らせいたしました。

小中学生を中心に約50名の皆様から参加の申込みをいただいたことに、心から感謝いたします。

木屋瀬の文化と伝統が織り込まれた歌留多を次世代へ引き継いでいくため、次回開催の際も多くの皆様に参加していただきますようお願い申し上げます。

■「第19回 木屋瀬芸術祭」開催に向けて

昨年5月開催予定であった「木屋瀬芸術祭」は、木屋瀬の皆様の協力をいただき実施行事も決まっておりましたが、新型コロナウイルスの感染拡大が顕著になったことから、3月末に中止の決定を行いました。その後、当記念館は4月初旬から6月中旬まで全館臨時休館となりました。

今年の芸術祭の開催については、コロナ禍の状況を注視しつつ、昨年のように準備は進めてまいりたいと考えています。

つきましては、地域の皆様が取り組んでいただく行事も、実施に向けてご検討をお願い申し上げます。

○開催日（予定）
5月3日（月・憲法記念日）
4日（火・みどりの日）
5日（水・こどもの日）

わたしの昔話

郡家・問屋場

木屋瀬宿の構成の中で郡家と問屋場は本町に置かれていた。郡家は宿場運営に必要な役付の人々の詰所であり又、集会所でもあった。すべての役付の任期は一年と決まっていた。

問屋場は人足や馬や駕籠、荷物の輸送や通信飛脚等々の事柄に当たっていた。通信飛脚には、幕府発行の継飛脚があり、大名発行の大名飛脚があり、町村発行の町飛脚もあった。町飛脚には早飛脚があり馬を用いて早かけする速達便である。荷物と同時に送るのんびりした普通便もあった。

継飛脚は幕府の書状を送る重要な公用の上、急を要する事でもあり、之の人足は、藩主の威光を借りて権威がましい態度で息巻いていた。宿泊や飲み食いの代金も借りるし、問屋場や渡し場等々にも難題をつけては金を借り平気でエイサッサと馳せ去ったようである。この継飛脚は御状箱をかついだ主役の前を先導者が走る。日暮になると先導者は高張提燈を灯して走る、これを見ただけで人々は隅の方に避けていた。

三島の宿で弥次さんと喜多八が、疲れ果てて歩いていると、状箱を担いだ人足が「エイ　サッサエイ　サッサ」と駆けて来る。これを見た喜多八が「なんだあの野郎　韋駄天ざまに駆けて来やがる」と言っているうちに、御状箱の角が弥次さんのびんたに強くあたる、けれど継飛脚の横暴な権力に歯向かえず、只一言いたいやーと怨めしそうに見送るだけだった。こうした目に余る振舞いも多々あったようだが人々は皆泣き寝入りしていたと言う。

馬舎は中町の寺道にあり横へ一列に馬十頭がつながれていた。厚い板が敷き詰めてあり其の上での馬の足踏の音が夜を通して途切れる事なく聞かれていたと言われている。此の馬馬の役目は主に左記の通りであった。

本馬―荷物だけを乗せる
軽尻馬―人だけを乗せる
乗掛馬―人と荷物を乗せる

此の馬舎の最後の馬の守は藤二郎さんであった。「藤二郎さんの赤ふんどし」と呼ばれ親しまれていた。常に赤ふんどし一つで裸であった。

問屋場はこうした諸々の事を取りさばいていたが、中でも人足集めには苦労があった。

大名行列に必要な人足は何百人と要求されても、これに応じて動員しなければならないし宿場役人は総がかりで助郷地区に飛び廻って必要人数を集めていたものである。

本町　柴田由美子

柴田豊廣遺稿・未発表より

■令和二年度「子供ゑびす頭（かしら）」報告

令和2年12月6日(日)、8名の児童による令和2年度「子供ゑびす頭」が須賀神社にて執り行なわれました。

はじめに、この行事の準備から本番まで親身になってご協力いただきました地域の皆さま方、またご芳志いただきました皆さま方に、令和2年度子供ゑびす頭の保護者を代表し心より御礼を申し上げます。

この行事は木屋瀬に江戸時代から伝わる由緒ある行事で、旧来は男の子が数え年で11歳(現在の小学校4年生)になると、地域の若衆(大人)の仲間入りをする儀式として行われたものです。現在では、毎年12月の第一土曜日と日曜日の2日間に渡って行われています。

昨年は新型コロナウイルスの感染拡大に伴うイベントの自粛要請、小学校の休校、緊急事態宣言の発令などによる社会情勢を鑑み、感染症予防対策を十分に講じながら規模・日程を縮小して行われました。

感染拡大の状況によっては行事の中止という選択肢も考えられましたが、子供たちにとって一生に一度の祝事をどのような形であっても行わせてあげたいという、地域の皆さまの温かいお気持ち、そしてコロナ禍のなか戸惑いながらも励まし合い、協力し合いながら太鼓や歌の練習に取り組んだ子供たちの頑張りにより、素晴らしい行事にすることができました。

柳勝二氏をはじめ、栗田泰次郎氏、そして青年会の方々には、お忙しい中厳しくも温かく子供たちをご指導していただきました。はじめは頼りなさそうに見えた子供たちが、練習を重ねていくうちに成長し、行事当日は頼もしくさえ見えました。また笹山車の巡行が中止となる中、子供たちに太鼓や采振りを経験させてあげたいという保護者の思いを酌んでいただき、舩川大十会長をはじめとする青年会の方々のご協力のもと、当日は境内で練習の成果を披露することができました。

私が世話人として準備を進めていくにあたり一番に感じたことは、皆さまの地域を想う心、そして地域の子供たちを想う心です。伝統行事と地域の関係は、歴史の積み重ねが大きいほど、行事が地域を結集して固め、逆に地域は行事を守り伝えようとする、相互作用が起きてくるのだと感じました。子供たちにとってこの行事が、地域への関わりを考えるきっかけになってもらえればと考えています。

例年通りの日程では開催できませんでしたが、練習や本番での子供たちの笑顔を見て、受け継がれてきた想いは繋げられたのではないかと感じました。

来年度以降も、この伝統ある行事が、そして子供たちの笑顔が、地域に繋がっていくことを祈念しています。

世話人代表　高野　大吾